の場合よりずいぶん軽いものだといえる。口述試験以降の，博士課程の研究や博士論文の審査に関しては，わが国のシステムと大差はない。

わが国の物理学における教育システムでは，早くから研究に従事できる点（特に地方大学ほどその傾向が強いようである）では恵まれている。それゆえ，ある特定の分野の専門知識・技術の修得に関しては優れた教育効果があるだろう。その反面，いくら学部の段階での教育レベルが高いとは言え，大学院レベルの基礎教育の密度には大いに疑問がある。米国のシステムでは，物理学全般にわたっての視野というかセンス・発想という類を養おうとすることに，より重点が置かれているといえよう。

いずれにせよ，私にとってのカルフォルニア大学院生活は最高に楽しかった。仲間と一緒に徹底的に勉強して，同時に体力の続く限り遊びまくって駆け抜けた2年間であった。

パドバ大学の壁

工学研究科学生　吉　高　淳　夫

今回の「広大フォーラム」は留学がテーマだそうですが，私の場合は留学ではありません。私の所属する研究室の仕事で昨年の秋に約3週間イタリアに滞在しました。その時の体験をお話ししたいと思います。

今回のイタリア行きが私にとって初めての海外体験でした。私が初めに滞在したのはモンテベルーナという，ベネチアから列車で1時間ほど北へ向かったところにある小さな田舎の町です。一番賑やかなところが西条の4分の1くらいといったところでしょうか。こんな小さな町にも古くからの建物は残っており，タバコ屋の店先には建物を写した絵葉書がありました。町の中心から少し離れたところにある大きな教会の横を通ったとき，高校生らしい学生が大勢集まっているのを見ました。たまたまその中にむこうでお世話になったBedin氏の娘さんを見つけることができたので何をしていたのか尋ねたところ，先生の授業の進めかたが気に入らなくて皆で授業をボイコットしたのだと言っていました。

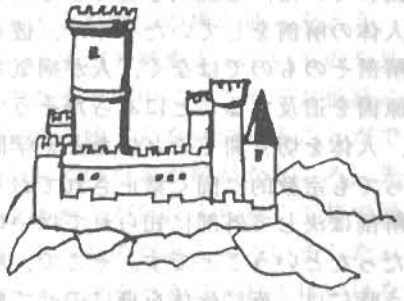
イタリアを語るときに忘れてはいけないのが，食べ物のことでしょう。イタリアといったら多くの方がまず初めに連想するものにパスタがあると思います。日本でも見かけるようなものから，マカロニを5ミリぐらいの長さに細かく切って豆と混ぜ合わせ雑炊のようにしたもの，小さなぎょうざに似ていて中に挽き肉が入っているものなど様々です。種類はとにかく豊富で，同じものを2度食べることはありませんでした。パスタ以外では仔豚の丸焼き，鹿の肉の料理，生ハムなど実に様々なものが豊富にあります。

1週間後，私とBedin氏はミラノへと向かいました。私たちが開発したシステムのプロトタイプをSMAUというコンピュータショウに出品する為です。ミラノに着いてまず目についたのが路上駐車をしている自動車の多さです。2列なんかは当たり前でひどいところでは3列にもなって自動車が道路にとめられています。一番奥にとめてある自動車はどうするのでしょうか。他人事ながら心配してしまいます。ミラノでは地下鉄を活用しました。切符は1枚800リラ（約80円）で区間に関係なくこの値段です。切符には「75分間有効」と書かれており，その時間内であれば（改札を出ない限り）どこへでも行けるというものでした。

ミラノで一番印象に残ったのが，ドォーモを訪れたことです。ドォーモというのはキリスト教の大聖堂のことで，数多くの尖塔が空に向かって林立しています。初めにこの建物を見た瞬間その大きさに圧倒され，思わず息をのみました。地上から塔の先端まではおそらく100メートルはあります。屋上に上がる階段を登ってみると，地上から見た時には判らなかったのですが，各々の塔の先端には人の前身像が彫られているのが判りました。ドォーモの上では人々が斜面に腰を下ろし，ミラノの街並みを眺めていました。その日の夕方，Bedin氏とドォーモの見えるレストランで食事をしていたところドォーモの前にたくさんの人が集っているのが目に入りました。しばらくすると，人々が少しずつドォーモの中に入って行くのが目に入りました。「何が始まるの？」と尋ねたところ「多分演奏会だろう」という返事。とすると，場所が場所だけに，パイプオルガンの演奏以外考えられません。そう考えるや否や，食事を早目にきり上げ，Bedin氏とドォーモへと向かいました。入口では演奏される曲名を印刷した小さな紙が配られ，入場料はとりませんでした。良さそうな席を見つけ座る。あまりかしこまった雰囲気ではなく，話し声があちこちで聞こえています。高い天井から吊るされたマイクの前に人が立って曲名の紹介をし，そして演奏が始まりました。何と重みのある音なのだろう。日本でパイプオルガンの演奏を聴いたことも2，3回ありますが，その音とは違います。音量はとても豊かで，奏者が鍵盤から指を離した後も残響が響き渡っています。「すごい」以外の言葉は見つかりません。Bedin氏によるとこのような演奏会は割合頻繁に行なわれており，経済的には企業からのバックアップにより支えられているということでした。

イタリアを去る前日だったでしょうか，私はBedin氏のお世話でパドバ大学を見学することができました。この大学はイタリアで2番目にできた大学だそうで，その歴史は建物の壁が物語っています。この大学の壁には当時の学生や先生の名前を彫り込んだ粘土製（？）の紋章みたいなものが所狭しとばかりに並べられています。その大きさは30×20cmほどで，中には60×40cmほどの大きさのものもあります。ここの壁にこのような紋章みたいなものが掲げられることはその人が大変に優秀であったことの証であるといいます。当時大学に入れるのは相当に裕福な家庭に限られていたそうで，ここに名前が載っている人たちは，家庭的にも学問的にも恵まれた環境にあったといえると思います。次に私たちはあのガリレオ・ガリレイが講義をしたという講義台を見せてもらいました。その台は長い時間が経過したせいかぼろぼろの木でできていました。この講義台は後にいる学生にもガレリオの姿がよく見えるようにと，当時の学生たちが自ら材木を集めて作ったものだと説明を受けました。そのとき，今までそこまで熱心に講義を受けなかった自分を素直に反省し，彼等の勉学に対する姿勢に尊敬の念を抱きました。

次に医学部の解剖実験室を見せてもらいました。その部屋は比較的狭く，窮屈な造りになっています。中央に解剖台があり，その傍らに先生の座る椅子がありました。それらを丸く取り囲むようなかたちで，段階状に手すりがついています。手すりと手すりの間は40cmほどしかなく，そこに学生たちが立って解剖の様子を見たのだといいます。解剖台の中央には穴があいており，その真下には当時川が流れていた，と説明を受けました。ここでは人体の解剖をしていたそうで，彼らの関心は解剖そのものではなく，人が病気などで死ぬ原因を追及することにあったそうです。当時，人体を切り開くことはたとえ学問の為であっても宗教的に固く禁止されており，人体の解剖は決して外部に知られてはいけないことだったということです。そこで，解剖を行なう時には，夜に死体を舟にのせて解剖台の下まで運び，死体を上に持ち上げて解剖をしたといいます。もし警察（？）が見回りに

来た時は，すぐにその死体を下に下ろし，その代わりにあらかじめ用意しておいた牛などの死体を解剖台にのせて知られないようにしていたということです。別の部屋には，当時自らの意思で献体をした先生の頭蓋骨が置かれていました。当時の学生，先生方の探求心は我々の想像以上に強いものだったのだろうと思いました。

今回イタリアを訪れて私が感じたことは，歴史的な建造物や芸術作品に自然な形で接することができる環境にあるということです。短い間でしたが，ここでは語りきれないほど多くの体験をすることができました。これから海外を訪れようと考えている方は，御自分で計画をたてて街の中へと飛び出してみてください。トラブルにも巻き込まれることがあるかもしれませんが，得るものは多いと思います。